

令和5年度 研究概要

<p>所属名</p> <p>カリキュラムセンター</p>	<p>研究会議名</p> <p>高校教育研究会議</p>
<p>研究主題</p>	<p>評価観の転換による主体的・対話的で深い学びの実現 ～思考プロセスの可視化（あいだのいちまい）による Assessment 評価の実践を通じて～</p>
<p>資質・能力 育成を目指す</p>	<p>思考力</p> <p>思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく</p>
<p>研究内容</p>	<p>平成28年12月の中央教育審議会答申において、高等学校における教育については、自らの人生や社会の在り方を見据えてどのような力を主体的に育むかよりも、大学入学者選抜に向けた対策が学習の動機付けとなりがちであることが課題であり、知識の暗記・再生や暗記した解法パターンの適用の評価に偏りがちであること、小・中学校に比べ知識伝達型の授業にとどまりがちであることや、卒業後の学習や社会生活に必要な力の育成につながっていないことなどが指摘された。また、令和2年2月の「市立高等学校改革推進計画第2次計画」においても共通のキーワードとして「学習意欲の低下」「正解（知識）の暗記」「正解主義」が課題として挙げられた。急激に変化する時代の中で、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが学校教育には求められている。高木も言うように、「変わらなくてはならないのは、こどもたちではなく、教師である。」¹そのためには、新学習指導要領の着実な実施が重要であることが令和3年1月の中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」でも示されており、指導に当たっては、資質・能力が偏りなく育成されるよう児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うこととされている。</p> <p>一方、令和2年度の山本による調査では、観点別学習状況の評価の方法について、授業者の困り感が存在することが明らかにされており、市内各高校において資質・能力の育成に向けた学習指導と学習評価について様々な授業改善が進められている。しかしながら、本研究員へのインタビューからは、指導と評価の一体化に向けた校内体制への不安観が指摘され、本研究会で行った市内高校教員への質問紙調査の結果においては、自由記述の8割以上が評価についてのネガティブな内容となるなど、高等学校における新学習指導要領の実施から1年が経過し、令和6年度から高等学校3学年の課程が揃うことになる現在もなお、観点別学習状況の評価、指導と評価の一体化については継続して存在する課題であることが分かる。</p> <p>これらの課題を踏まえ、本研究会議では、授業者・生徒双方の評価観の転換を試みる。卒業後の進路選択や入学試験と結び付くことで Evaluation として授業者が生徒を「値踏み、格付け（分類）」するという意味で行われてきた評価観を「学習過程の中で学び手がどのように向上したかを見取り、支援する評価」である Assessment としての評価に変えることで主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につながると考えた。開発を進めている、生徒に思考のプロセスを言語化させる「あいだのいちまい」を用いることにより評価観がどのように変容するかを検証する。評価を基軸とした授業改善については例えば本市、新田（2017）など小中学校における実践が多く、子どもが自らの学びを実感し自己調整しながら学ぶことができるとなどが明らかとなっており、これらを例の少ない高等学校において実践することに意義があろう。</p>

¹高木展郎『評価が変わる、授業を変える 資質能力を育てるカリキュラム・マネジメントとアセスメントとしての評価』2019 株式会社三省堂